

接尾辞—クサシ再考

— 古代・近代の使用状況から —

池上 尚

一 はじめに

古代日本語における〈不快なおいがする〉さまの表現には、マイナス評価を表す形容詞(一)クサシや、属性形容詞と似た働きをし、プラス／マイナス両方の評価性を併せ持つ自動詞ニホフ・自動詞的用法「ニホヒスル」などを用いる。ただし、自動詞(的用法)がマイナス評価を表す用例は非常に少なく(池上二〇一三)、〈不快なおいがする〉さまの表現においては、形容詞が優勢のようである。

こうした状況の背景には、自動詞(的用法)側の意味変化の経緯と、形容詞側の接尾辞の結合力(上接成分を拡大する力)⁽²⁾とがあった。すなわち、ニホフ(その連用形名詞ニホヒ)は、マイナスの評価性を獲得するまでに長い時間を要し本来の評価性であるプラスが強く意識され続けた上に、クサシの高い結合力により多くのクサシが産出され、マイナス評価の需要が高まらなかったと考えられるのである。

池上(二〇一二)では、クサシの発生から近世に至るまでの展開

を追い、上接成分が拡大していく史的変遷を考察した。そして、上接成分によってクサシの意味をA・B・Cクサシの三つに分け、その連続性を指摘した。しかし、この三つに当てはまらない特殊なクサシの位置づけや、近代以降の様相には触れておらず、クサイの先行研究も十分に参考にできていないという問題点が残る。

そこで、本稿では、古代・近代を通してクサシを調査し、より網羅的な考察を目指す。まず、先行研究におけるクサイの扱いを概観した上で本稿の立場を述べる(二)。次に、クサシの上接成分の分類方法を示し(三・一)、その分類に従ってクサシの表現特性・史的変遷を考察する(三・二)。なお、調査の対象とした資料については、本稿末尾を参照されたい。

二 先行研究と本稿の立場

先行研究では、現代語研究の立場から、辞書に立項されるような一語化した(と考えられている)クサイの考察が進められてきた。こ

これらの先行研究に共通するのは、面倒クサイや照レクサイ、青クサイ（の転義〈未熟だ〉）などにおける「クサイの意味が純粋な嗅覚表現ではないことに注目し、どのような意味であるかを記述する点であり、表一にまとめるように、それぞれの立場から様々な名称が与えられた。

先行研究にはば共通するのは、嗅覚表現とは考えにくい「クサイの意味（接尾辞の意味）」に、一般に定着した転義（語の意味、前述の青クサイなど）を含める点である。本質的に、嗅覚表現的でない接尾辞「クサイの意味と、転義が、嗅覚表現的でない語「クサイの意味」という、異質なものを同次元に捉えるのは、共時的な考察ゆえと考える。

論者により立場が分かれるのは、嗅覚表現とは考えにくい「クサイ」表一 嗅覚表現とは考えにくい「クサイ」の扱い

先行研究	名称	転義	強調
玉村（一九八八）	「非嗅覚」		
山下（一九九五）	「臭覚の意味を含まない」等	含める	含める
門倉（一九九六）	「雰囲気」		
森田（一九七七）	「ようす」		
齋藤（一九九五）		①	言及なし
飛田・浅田（一九九二）	「感じ」	含めない	含めず別に立てる

①齋藤（一九九五）は、転義を別に扱うとしながらも、田舎クサイ・坊主クサイなど（の転義）を嗅覚表現とは考えにくい「クサイ」に含める。
②門倉（一九九六）は、強調をすべての「クサイ」にあてはまる意味だとする。

の意味に、単なる強調と説明されることのある「クサイ（照レクサイなど）の意味をも含めるか否かという点である。しかし、そもそもなぜ「クサイ」が強調を表しうるのか、その理由については諸氏共通に十分な説明がない。ただし、門倉（一九九六）は、すべての「クサイ」が強調を表すと指摘しており、「クサイ」それ自体の意味において強調が重要な位置を占めることを示唆する。

現代語「クサイ」の意味領域の広さは、これらの先行研究により把握することができよう。しかし、「クサシ」を通史的に考察する場合には、前述の、本質的に、嗅覚表現的でない接尾辞「クサシ」の意味と、転義が、嗅覚表現的でない語「クサシ」の意味とを峻別する必要がある。接尾辞の発生・展開を記述する際に、文脈から付与された語用論の意味である転義（語の意味）はひとまず問題とならないためである。転義を除いてもなお、本質的に、嗅覚表現らしからぬ振る舞いをする「クサシ」が存在することに注目し、これと純粋な嗅覚表現である「クサシ」との連続性・関連性を史的観点から見出してみたい。また、門倉氏の主張も踏まえ、「クサシ」と強調の意味との関係も丁寧に記述する。

なお、本稿が中心に論じるのは、「クサシ」が上接する成分の拡大である。「クサイ」の上接成分に注目した先行研究としては、玉村（一九八八）や山下（一九九五）がある。両氏により、上接成分は名詞・形容（動）詞・動詞となる傾向があること、その品詞による「クサイ」の意味のちがいが明らかにされた。しかし、先に触れたように、両氏ともに共時的な立場をとるため、「クサイ」の意味は語の意味であ

る転義を含む。本稿では、上接成分による「クサシの本質的な意味（接尾辞の意味）」を見る目的で上接成分を分類するため、両氏の指摘を参考にしつつも、転義を除いた上での名詞の細分化、動詞の具体的な規定を行った。また、辞書には立項されないような、ある時代に特有な一過性の結合の語も含め、「クサシの史的变化を体系的に記述してみたい。

三 「クサシの意味とその発達過程

三・一 上接成分の分類方法

「クサシの意味は、上接成分を基準に判断する。先にその概要を示すと、次の表二のようなになる。

まず、上接成分に、嗅覚刺激を発散させ得る事態の変化（↓物質の変化を表す動詞の連用形）、具体的な形を備え嗅覚刺激を発散させ得るもの（↓具体名詞）をとる場合、「クサシは嗅覚表現として（〜の不快なおいがする）」を表すと考える。これをAクサシと称する（焦ゲクサシ・黴クサシなど）。

次に、上接成分に、嗅覚刺激を発散させ得ない抽象的な概念（抽象名詞、形容（動）詞の語幹⁽³⁾）をとる場合、「クサシは純粋な嗅覚表現とは言いがたく、（〜の不快な雰囲気がある）」を表すと考える。これをCクサシと称する（面倒クサシなど）。このような「クサシは、一

表二 「クサシの意味

名称	上接成分				「クサシの意味
	Aクサシ	名詞		（物質の変化を表す） 動詞の連用形	
		抽象	具体		
Bクサシ		身分・立場・場所	物の名前		（〜の不快なおい） + 雰囲気 がある
Cクサシ	形容動詞語幹	形容詞語幹			（〜の不快なおい） 雰囲気 がある
Aクサシ	形容詞 旨シ	語幹			（〜の不快なおい） 雰囲気 がある
Cクサシ	動詞 照レル	連用形			（〜の不快なおい） 雰囲気 がある
文末外接形式	句				（〜の不快なおい） 雰囲気 がある

見嗅覚表現らしからぬ振る舞いをするが、そもそも、においと雰囲気とは「発散」という共通項を有する「気」である（E・ミンコフスキー一九八三）ため、こうした雰囲気に関わるCクサシも、嗅覚表現の一面面として捉えられる。前述したように、このCクサシはあくまで、接尾辞の本質的な意味としての雰囲気であり、語の転義として雰囲気を表す「クサシの意味（キナクサシ（怪しい）など）は含まない。

さて、このように上接成分を見ていった場合、具体名詞／抽象名詞いずれにも解釈できる名詞の存在に気づく。それは、身分・立場・場所（それぞれ、坊主・男・田舎など）を表す名詞である。これらは、実際にその身分・立場にある人間やその場所の構成物といった、「具

体的な形を備え嗅覚刺激を発散させ得るもの」と捉えられる一方、抽象度が増し一般化した「嗅覚刺激を発散させ得ない抽象的な概念」とも捉えられる。例えば、男クサシの場合、 クサシ は、対象が 具体 としての「男」と同定できるだけの クサシ を 発散 したと認識したことを表すとも、対象が 抽象 としての「男」と同定できるだけの 男 を 発散 したと認識したことを表すとも考えられる。

しかし、において 男 と 男 が同質の「 男 」であるのはすでに述べた通りで、においても 男 も 男 も 発散 させ得る対象において、どちらを 発散 しているかを問うても、主観的な判断しか下せない。そこで、対象が 具体 ・ 抽象 いずれの「 男 」としても同定できるだけの クサシ において、 男 を 発散 したと認識したことを、 クサシ が表すと見てはどうか。つまり、上接成分に「 具体 ・ 抽象 」名詞をとると捉えて、 クサシ は （） の不快な （） において、 男 を 発散 することを表すと考えるのである。これを Bクサシ と称する。繰り返すことになるが、 Bクサシ の表す 男 は、 Bクサシ という接尾辞を持つ本質的な意味であり、語の転義ではない。

以上の A ・ B ・ Cクサシ が クサシ の基本的な意味である。今回の調査により見られた上接成分の具体例は、本稿末尾の別表を参照されたい。 クサシ の基本的な意味から外れる特殊な クサシ （表二Aクサシ・Cクサシ・文末外接形式）については、三・三で詳述する。

なお、悪クサシ・薄クサシ・モノクサシの三語は考察の対象外とした。悪・薄クサシは強弱を表す接頭辞を冠したクサシと考えられるた

めである。モノクサシは、語構成（モノは名詞か接頭辞か）や意味の広がりなど問題があるため、別稿でその語史を考察することにした。

三・二以降では、それぞれの意味がいつ発生し、どのような順序で展開してきたのかを明らかにするとともに、基本的な意味にあてはまらない特殊な クサシ を含め、 クサシ 語彙の体系的な把握を試みる。

以下、表三をもとに考察を進める。表三は、調査によって得られた クサシ 全三三九例を上接成分によって分類し、時代ごとに用例数（括弧内の数字は異なり語数）の分布を示したものである。なお、時代が下り調査資料の数が増加するに伴い、用例数ももちろん増加する。よって、用例数の増加を意味の発達と捉えるのではなく、あくまで意味の発生順（上接成分の拡大）を見る目的で表三を提示する。

三・二 クサシ の基本的な意味— A ・ B ・ Cクサシ —

クサシ の初出例は、中古前期に見える具体名詞を上接する Aクサシ である⁽¹⁾。これにやや遅れて、 Bクサシ が見える⁽²⁾。

① 姓 奈万久佐志（新撰字鏡（898—901頃））

② 中納言「こもちくさからぬ襖もてこ」とて香の唐櫃より染み返りたるもて参りたれば、二所うち着給ひて（宇津保物語（970—

999頃）

出現順や用例数の偏りから見て、 クサシ は、純粋な嗅覚表現に関

わる語を産出するための接尾辞Aクサシとしてまずは使用され始めたことが分かる。Bクサシは、中古・中世前期ともに用例数が少なく、出現した当初は、頻用されていたわけではないようである。

中世前期には、Aクサシが、変化を表す動詞の連用形をも上接するようになる(③)。また、形容詞語幹を上接するCクサシも登場する(④)。

③近江にかありといふなるかれひ山君は越えけり人とねぐさし(金葉和歌集(1124-1127)恋下・五〇〇)

ただし、形容詞語幹を上接するCクサシは中世後期には例が見えず、また、全体の用例数が増加する近世前期においてもわずか一例し

④大納言ノ北ノ方ハ、大臣ノ居給ヘル喬ノ簾ヨリ近クテ見ルニ、大
臣ノ御形チ・音気ハヒ・薫ノ香ヨリ始テ、世ニ不似ズ微妙キヲ見
ルニ、我ガ身ノ宿世心疎ク思エ、「何ナル人、此ル人ニ副テ有ラ
ム。我レハ年老テ舊臆キ人ニ副タルガ事ニ触テ六借ク」思ユルニ、
弥ヨ此ノ大臣ヲ見奉ルニ、心ノ置所无ク侘シク思ユ。(今昔物語
集(1120頃か)巻第二二第八)

表三 ークサシ述べ語数

名称	上接成分											
	Aクサシ	(物質の変化を表す) 動詞の連用形		Bクサシ	名詞		Cクサシ	形容詞語幹	形容詞語幹	Aクサシ		
		物の名前	動詞の連用形		具体	抽象					身分・立場・場所	
												形容詞語幹
計	文末外接形式	動詞照レル	句	動詞照レル	連用形	語幹	語幹	語幹	語幹	語幹		
中古	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12 (6)	0
											12 (6)	1 (1)
中世前期	24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20 (6)	2 (2)
											22 (8)	1 (1)
中世後期	62	0	0	0	0	0	0	0	0	0	47 (13)	9 (5)
											56 (18)	1 (1)
近世前期	246	0	0	1	0	0	0	0	0	0	172 (34)	4 (3)
											176 (37)	36 (16)
近世中後期	399	0	0	5	0	0	0	0	0	0	216 (44)	17 (6)
											233 (50)	87 (28)
近代 (明治)	426	0	0	0	0	0	0	0	0	0	225 (50)	9 (7)
											234 (57)	143 (35)
近代 (大正・昭和)	1160	1	85	0	0	0	0	0	0	0	402 (82)	13 (5)
											415 (87)	502 (46)
計	2330	1	85	6	0	0	0	0	0	0	1095 (137)	53 (12)
											1148 (149)	770 (81)

推測するに、その雰囲気には評価性が認められない。つまり、クサシそれ自体にも評価性は認められず、単に（クサシの雰囲気がする）を表すと考えられる。クサシのようなマイナス評価が認められないため、クサシとする。この特殊なクサシは、クサシの中でも発達が遅く、照レルを上接するにとどまった。

⑧見ず知らずの他人よりも、内々の人に見てゐられる方が、遙かにクサシでもあれば、てれ臭くもあるやうなもので（多情仏心

（1922）里見弴*神奈川生まれ）

⑨均平が、振り返つてにやり笑うので、加世子も口元につこりして、照れくさそうに父の側へ寄つて来た。（縮図（1941）徳田秋声

*北海道生まれ）

なお、クサシ全八五例中、五〇例が太宰治（青森生まれ）作品の用例であり、一般にどれだけ広く定着していたのかは未だ不明な部分が残る。この語が広く認識されるようになる契機として太宰を位置づけることもできようが、今後、同時期の調査を進め、照レクサシの定着する過程を一層明らかにしていく必要がある。

クサシは、中古・中世と徐々に上接成分を広げ、近世・近代には、評価性を問題としない接尾辞としても使用されるに至った。ただし、そうしたクサシは、中央語では一時的な使用にとどまったり、他の結合例を見出せなかつたりと、非常に例外的なものであつたらしい。

（三）文末外接形式

（三・一）表現価値

ここまでに見てきたクサシと用法を大きく異にするのが、近代（大正）に登場する文末外接形式⁽⁶⁾である。上接句の表す事態に対する話者の推量を表し、助動詞のように機能する。そして、クサシの基本的な意味と同様に、上接する句への主観的なマイナス評価が付随する。

表二では、他のクサシと意味記述を揃えるために（クサシの不快感がする）としたものの、より自然に表現すれば（クサシの不快感・感じがする）となる。クサシのこうした用法は、近年における若年層使用の印象が強いが、その誕生は大正期まで遡ることを確認できる。

⑩小田原を訪ねた時、先生は風邪を引いて寝てゐた。奥さんも丹前を着て鼻をかみ乍ら「どうやら一妾もお相伴になつた」くさいのよ。」と云つてゐた。元気なのは却つて只妹さんだけだつた。（竹沢先生と云ふ人（1924）長与善郎*東京生まれ）

小説・落語類の調査では例⑩を得たのみであつたため、用例の少なさを補う目的で、追加調査として国立国会図書館「国会会議録検索システム」⁽⁸⁾も利用した。しかし、得られたのは、次に示す二例のみであつたことから、国会のような改まり度の高い場における話しことばにはほとんど現れない、非常に砕けた・俗めいた表現であることが分かる。⁽⁹⁾

①われわれはどう考えてみても「日本側の方で権利を放棄した」くさい

というようなことはお答えはいたしておりますけれども、アメリカ側に放棄したとは言っておるのではないのでありまして、（第二二回・衆・外務委員会（1955/11） 福島慎太郎*東京生まれ）

②政府当局の方では、これはどうも「アメリカの秘密を盗んで公表した」くさいと思ひ、本人はそんなことは全然知らないで、全くそれとは無関係に自分が発明して公表したという場合に、（第二四回・衆・外務委員会（1956/16） 松本七郎*福岡生まれ）

文末外接形式クサシは、ラシイやヨウダなどの助動詞と類義関係にある。ただし、ラシイやヨウダの推量には評価性の限定がないのに対し、クサシはマイナスに限定されるようである。そのマイナス評価は、上接句の表す事態の成立に対する疑念や懸念となつて現れる。⁽¹⁰⁾ また、文末外接形式化が始まつてから一般に定着するまでの過程が、ラシイやヨウダに比べ非常に緩やかであるというちがひも指摘できる。

（三・二） 文末外接形式化の背景

本来、嗅覚表現のための接尾辞であつた「クサシ」が、なぜ話者の主観的判断を表すようになるのであろうか。

ここで、新語を産出する結合力に注目してみる。基本的な意味の新語数を時代毎に示した表四からは、「クサシ」が通史的に結合力を発揮し続けていることが分かる。

また、現代語の「クサイ」について内省してみても、結合力は衰退す

表四 新語数

分類／時代	Aクサシ	Bクサシ	Cクサシ
中古	12 (6)	1 (1)	0
中世前期	8 (6)	1 (1)	1 (1)
中世後期	23 (13)	5 (3)	1 (1)
近世前期	54 (24)	26 (10)	35 (15)
近世中後期	44 (23)	25 (18)	43 (19)
近代 (明治)	46 (32)	38 (23)	35 (21)
近代 (大正・昭和)	65 (45)	62 (41)	37 (24)

延べ語数（異なり語数）

るところか、次々に新たな「クサイ」を生産することが可能であると思われる。こうした現代語の状況から逆算してみても、「クサシ」は（基本的な意味に限り）結合力を維持し続けている接尾辞であり、この点にこそ、「クサシ」の和語接辞としての特徴がある。⁽¹¹⁾ 「クサシ」の文末外接形式化の背景のひとつには、こうした句をも上接可能にする結合力の高さが挙げられる。そして、上接成分の拡大に伴う、雰囲気に関わる意味領域の獲得が、雰囲気への疑念・懸念を伴った話者の主観的判断という用法を導いたのであろう。

三・四 強調の位置づけ

↑クサシは、時代が下るにつれて上接する成分を拡大していき、Aクサシ↓Bクサシ↓Cクサシの順に発達してきた。具体的な事物のみならず抽象的な概念をも上接するようになると、↑クサシそれ自体の意味に外延の拡張・内包の縮小が生じる。すなわち、嗅覚で認識される嗅覚刺激（におい）がより抽象化し、（嗅覚という限定のない）感覚で認識される刺激（雰囲気）に対する不快感をも表すようになる。上接成分の拡大は、その接尾辞が意味の抽象化・一般化の可能性を本質的に持ち合わせている場合に可能となる（阪倉一九六六）ことから、においが雰囲気と連続する「気」の一つであることが分かる。

こうした上接成分の拡大に伴う↑クサシの意味の抽象化は、A・Cクサシに至りマイナス評価の消失にも繋がる。しかし、↑クサシの意味の構成要素として重要であろうマイナス評価が、描写しようとする事態において必要でないならば、↓クサシそれ自体を使用する意義がなくなる。評価性が問題とならない場合にも↓クサシが使用されるのであれば、マイナス評価を別の基本義から前景化した意味と見てはどうであろうか。そして、その基本義が、先行研究で指摘されてきた強調と筆者は考える。

先行研究では、強調を嗅覚表現とは考えにくい↑クサイに含めて論じることが多かった（前掲表一）。しかし、筆者は、門倉（一九九六）のように、すべての↑クサシが有する基本義と考える。そもそも、不快や好悪といった二項対立的な評価は、話者が対象を過度に意識す

る際に生じる。↑クサシの表す不快感（マイナス評価）も、対象の属性（ここでは発散された「気」の程度が、話者が意識せずにはいられないほどに甚だしいと感じた結果生じたものである。この「発散された「気」の程度が過度であると感じる」という意味こそが、すべての↑クサシが有する、マイナス評価の根本にある基本義であり、従来、強調と呼ばれてきたものであろう。評価性の認められないA・Cクサシは「マイナス評価の消失」した不自然な意味ではなく、↑クサシの意味が抽象化したことにより、基本義である強調の前景化⇨マイナス評価の後景化した意味¹²なのである。

四 おわりに

↑クサシは、古代より継続的に結合力を発揮し、上接成分を拡大していった。そして、それに伴う意味の抽象化には、二段階あることも確認した。第一に、嗅覚表現から感覚表現への一般化、第二に、マイナス評価の後景化である。第一の意味の抽象化は、

Aクサシ（〜の不快なおいがする）
↓Bクサシ（〜の不快なおい+雰囲気がする）
↓Cクサシ（〜の不快な雰囲気がする）
面倒クサシなど

という発達順が、第二の意味の抽象化は、
Aクサシ（〜のにおいがする）
旨クサシ
Cクサシ（〜の雰囲気がする）
照レクサシ

という意味の誕生が、それぞれ体现するところとなっている。また、

第二の意味の抽象化（マイナス評価の後景化）が起こり得る背景には、「クサシの多様な意味の根本に、〈発散された「気」の程度が過度であると感ずる〉という強調の意味があるのだと指摘した。

そして、句を上接する文末外接形式の誕生についても触れ、「クサシ」がクサシと同様に、ある事態の成立に対する疑念や懸念を表すに至るまでを明らかにした。従来、個別に論じられることの多かった「クサシ」の多様な意味は、通史的な調査・考察により、上述のような体系として理解できよう。

本稿では、「クサシ」の本質的な意味に焦点化したため、個々の語の史の変遷についてはまったく触れられなかった。例えば、水クサシなど、「クサシ」がある成分と結合した後に転義が派生し、「クサシ」の本質的な意味（語構成要素を単純に足した意味）と転義とで、意味の交替が起きた語の歴史である。次々に新たな成分を上接していく「クサシ」の動的側面を明らかにした本稿の成果を踏まえ、一語化した「クサシ」に意味変化が生じる場合の様相といった、「クサシ」の静的側面を解明する必要がある。一語一語の詳細な考察は、今後の課題としたい。

注① 以下、古代・近代の別なく接尾辞を「クサシ」、単純形容詞をクサシ、合成形容詞を「クサシ」と表記する。ただし、現代語について言及する際は、「クサイ・（〜）クサイ」と表記する。

② 石井（一九九二）は、「造語力」（新語を産出する潜在的な能力）と「結合力」（過去における見出し語レベルでの新語産出力）とを区別し、可能性の度合いである「造語力」を、可能性が実現した結果である「結

合力」から推定するという一手段を示す。本稿の結合力も、石井氏の「結合力」と同様に、上接成分をいかに拡大してきたかという新語産出力を指す。

③ 抽象名詞は形容動詞語幹になる場合もあるため、ここでは両者を区別しない。

④ 『訓点語彙集成』（二〇〇七—一九〇九 汲古書院）によると、「唯聞虫也ナリサキ」(天理本金剛般若経集驗記平安初期点(850))の用例もあり、例

①よりやや年代を遡るようである。その他、訓点資料にはツグサシ(脛)、クチクサシ(腐)の和訓が見える(ともに中世前期のもの)。

⑤ 現代語では、「快いにおいがする」を表す語として四国方言に残る(吉田則夫(一九八二)「四国方言の感情語・形容語」高知県高知市原町四万川方言)『講座日本語の語彙』第八巻 方言の語彙(明治書院)。

⑥ 名称は尾上(二〇〇一)を援用した。

⑦ 「口承芸能であることや演者が中・高年の男性に偏っていることから、ことばそのものが保守的になる可能性が高い」(金澤裕之(一九九一)「明治期大阪語資料としての落語速記本とSPレコード」指定表現を中心に)『国語学』一六七)ため、新しい用法が見えないのだと推測される。

⑧ 一九四七年第一回〜二〇一二年第一八〇回までの衆参両院、通常・特別・臨時国会すべての議事録を検索対象とした。国会議事録の資料性については、松田謙次郎編(二〇〇八)『国会会議録を使った日本語研究』(ひつじ書房)を参考にした。

⑨ 現代語においても、非常に砕けた場面でなければ使用しにくい印象がある。新聞・雑誌などには見られないが、インターネット上には以下のような例が見られる(すべて二〇一一年二月四日閲覧)。

・ 正確に言うと 痛痒いんですわな / ちつと膿んでる / くさいんだよね (http://yaplog.jp/chris_t/archive/14)
 ・ 「ボートのエンジンが死んだ」くさいので、船のエンジンどなたか、お安く譲って頂けないでしょうか。 (http://fr.twitter.com/#/ZACKsanpee/status/132294541465223170)

(10) こうした疑念・懸念の意味は、形容詞クサシが意味を拡張した場合の「怪しい」の意味にも確認される(池上二〇一二)。

「亀戸の方より来る人に、武者修行ていの者を見かけざるやと問ふに、その武者修行の人は、今剣術の稽古道 具を担ぎたる人が七八人にて、彼処の冠木門の内へ連こみたりと聞き、「イヤアそいつア臭い話した」(七偏人・二編・巻下)

(11) 「通時的に生産力を示しているのは、接頭辞「御」などの漢語系接辞には例があるものの、限られた場合のみである」(漆谷広樹(二〇一〇))

「接尾辞「げ」と助動詞「そうだ」の通時的研究」ひつじ書房

(12) 山下(一九九五)における「クサイ」の記述には、本稿の「過度」とほぼ同義の「濃厚」「過剰」という表現が見える。ただし、「濃厚」「過剰」と強調との関係に言及は見られない。

参考文献

- 石井正彦(一九九二)「造語力をはかるために」『日本語学』一一・五
尾上圭介(二〇〇二)『文法と意味Ⅰ』くろしお出版
門倉正美(一九九六)「くさい」『あいまい語辞典』東京堂出版
斎藤倫明(一九九五)「語構成と意味―合成形容詞「くさい」を例として考える―」『国文学 解釈と鑑賞』六〇・一
阪倉篤義(一九六六)『語構成の研究』角川書店
玉村千恵子(一九八八)「嗅覚と非嗅覚人合成語「くさい」をめぐる―」『日本語』一・六
飛田良文・浅田秀子(一九九二)『現代形容詞用法辞典』大修館書店
三宅知宏(二〇〇五)「現代日本語における文法化―内容語と機能語の連続性をめぐって―」『日本語の研究』一・三
森田良行(一九七七)『基礎日本語Ⅰ』角川書店
山下喜代(一九九五)「形容詞性接尾辞「ばい・らしい・くさい」について」『講座日本語教育』三〇
E・ミンコフスキー(中村雄二郎・松本小四郎訳)(一九八三)『精神のコスモロジーへ』人文書院

接尾辞「クサシ」再考(池上)

池上 尚(二〇一二)「嗅覚表現形容詞「クサシ」「くサシ」―接尾辞「ク

サシ」の発達を中心に―」『国語語彙史の研究』三一

――(二〇一三)「嗅覚表現自動詞ニホフの意味の下降について―」『名詞＋スル』との関連から―『国文学研究』一七〇

付記

池上(二〇一二)は、玉村(一九八八)・山下(一九九五)・門倉(一九九六)などの重要な先行研究の検討を経ずに稿をなした部分があった。特に、玉村(一九八八)は、共時的な立場から、「クサイ」の意味と上接成分との関連についていち早く注目したものであり、接尾辞研究において重要な位置を占める。先学の研究成果を十分に取り入れられなかったことを、この場でお詫び申し上げる。本稿は、その不足を補いながら、前稿を再考する目的で執筆した。

調査対象資料(一部)

紙幅の関係上、用例の得られた資料を中心に、調査対象の一部を示す。調査には、既刊の総索引・テキストの他、国文学研究資料館「日本古典文学大系データベース」、新編国歌大観CD-ROM、日国オンラインも利用した(*は全数調査を終えていない資料に付す)。【】で示した資料ジャンルは、一覧のための便宜的なものである。
引用に際しては、適宜表記を私に改め、傍線や「」、――を付した部分がある。

- 上代…古事記・日本書紀・万葉集
中古…『仮名散文Ⅰ期』伊勢物語・土左日記・大和物語・平中物語・宇津保物語・蜻蛉日記・落窪物語・枕草子・和泉式部日記・源氏物語・紫式部日記・栄花物語・浜松中納言物語・堤中納言物語・更級日記・狭衣物語
中世前期…『仮名散文Ⅱ期』讃岐典侍日記・大鏡・今鏡・とりかへばや物語・篁物語・松浦宮物語・無名草子・百詠和歌・源通親日記・無名抄・たまきはる・うたたね・十六夜日記・中務内侍日記・徒然草・竹むきが記・とはずが

たり・増鏡【説話】(宗教関係資料含む) 今昔物語集・古本説話集・打開集・唐物語・発心集・宇治拾遺物語・閑居友・今物語・撰集抄・十訓抄・古今著聞集・沙石集・親鸞集三帖和讃・日蓮聖人遺文・梅尾明恵上人伝記・梅尾明恵上人遺訓・一言芳談【和漢混淆文Ⅰ期】(漢文資料含む) 雲州往来・水鏡・方丈記・保元物語・平治物語・平家物語・海道記・東関紀行・源平盛衰記

中世後期：【和漢混淆文Ⅱ期】曾我物語・義経記・太平記・信長公記【室町物語】あしびき・転寝草紙・しぐれ・鴉鷲物語・岩屋の草子・かざしの姫君・高野物語・西行・依藤太物語・弁慶物語・毘沙門の本地・猿の草子・師門物語・さ、やき竹・大黒舞【抄物】杜詩統翠抄・漢書抄・百丈清規抄・史記抄・日本書紀兼俱抄・古文真宝桂林抄・古文真宝彦龍抄・山谷抄・湯山聯句抄・蒙求抄・莊子抄・毛詩抄・四河入海・三体詩幻雲抄・中興禪林風月集抄・玉塵抄・全九集・句及紙抄・中華若木詩抄・論語抄・五家正宗贊抄・【キリスタン資料】天草本平家物語・天草本伊曾保物語・天草本金句集・コンテムツスマンヂ・ぎやどべかどる・どちりなきりしたん【狂言台本】天正狂言本・祝本【その他】さ、めごと・連理秘抄・申楽談儀・あづまの道の記・河村誓真問書・地藏菩薩靈驗記

近世前期(一七二五)：【狂言台本Ⅰ期】虎明本・天理本・虎清本・和泉家古本・狂言記・忠政本・狂言記外・続狂言記【仮名草子】酒茶論・犬枕・恨の介・大坂物語・竹斎・薄雪物語・尤之双紙・清水物語・伊曾保物語・仁勢物語・是楽物語・為愚痴物語・ねごと草・浮世物語・元の木阿弥・都風俗鑑・好色袖鑑【浮世草子】好色訓蒙図彙・好色貝合・男色十寸鏡・好色破邪頭正・好色通変歌占・人倫糸屑・好色万金丹・好色大福帳・新色五巻書・けいせい色三味線・風流曲三味線・古今堪忍記・けいせい伝受紙子・傾城禁短氣・世間娘氣質・国姓爺明朝太平記・傾城手管三味線・傾城歌三味線・当世宗匠氣質【評判記】難波物語・野郎虫・たきつけ草・もえくゐけしすみ・色道大鏡・難波鉦・名女情比【噺本Ⅰ期】戲言養氣集・寒川入道筆記・醒睡笑・きのふはけふの物語・わらくさ・百物語・私可多咄・理屈物語・一休はなし・狂歌咄・竹斎はなし・一休諸国物語・秋の夜の友・宇喜蔵主古今咄揃・当世軽口咄揃にがわらひ・噺物語・杉楊枝・軽口大わらひ・当世手打笑・当世口まね笑・鹿野武左衛門口伝はなし・鹿の巻筆・正直咄大鑑・新竹斎・籠

耳・二休咄・諸国落首咄・枝珊瑚珠・軽口露がはなし・遊小僧・初音草噺大鑑・露新軽口はなし・軽口御前男・軽口ひやう金房・軽口あられ酒・露休置土産・軽口福蔵主【井原西鶴作品】好色一代男・難波の兒は伊勢の白粉・諸艶大鑑・西鶴諸国はなし・曆・凱陣八嶋・好色一代女・好色五人女・本朝二十不孝・男色大鑑・武道伝来記・懷硯・日本永代蔵・武家義理物語・嵐は無常物語・色里三所世帯・新可笑記・好色盛衰記・本朝桜陰比事・一目玉鉦・新吉原つねぐさ・世間胸算用・浮世栄花一代男・西鶴置土産・西鶴織留・西鶴俗つねぐさ・万の文反古・西鶴名残の友・俳諧石車・難波土産・精進膾・俳書発句その他【浄瑠璃Ⅰ期】(近松) 出世景清・三世相・津戸三郎・蟬丸・十二段・最明寺殿百人上臈・日本西王母・曾根崎心中・用明天王職人鑑・堀川波鼓・心中重井筒・五十年忌歌念仏・卯月の潤色・淀鯉出世清徳・碁盤太平記・心中万年草・孕常盤・吉野都女楠・冥途の飛脚・薩摩歌・今宮心中・姫山姥・夕霧阿波鳴渡・長町女腹切・大経師昔暦・嘉平次おさが生玉心中・国性爺合戦・聖徳太子絵伝記・博多小女郎波枕・山崎与次兵衛寿の門松・曾我會稽山・傾城酒吞童子・平家女護鳴・傾城島原蛙合戦・心中天の網島・双生隅田川・女殺油地獄・信州川中島合戦・心中宵庚申・浦島年代記【近世雑Ⅰ期】室町殿日記・理慶尼の記・おあむ物語・捷解新語・おさく物語・雑兵物語・女重宝記・町人囊・それぐさ・ひとりね・槐記【俳諧Ⅰ期】犬子集・毛吹草・埋木・芭蕉文集句集・真蹟去来文・三冊子・風俗文選

近世中後期：【浄瑠璃Ⅱ期】心中恋の中道・心中二つ腹帯・八百屋お七・壇浦兜軍記・猿丸太夫鹿巻毫・ひらかな盛衰記・夏祭浪花鑑・神靈矢口渡・桂川連理柵・伽羅先代萩・道中亀山噺・新版歌祭文・鎌倉三代記・近頃河原達引・蝶花形名歌島台【狂言台本Ⅱ期】保教本・狂言記拾遺・伊藤源之丞本・名女川本・虎寛本・虎光本・雲形本・賢通本【談義本】艶道通鑑・田舎荘子・風俗文集・昔の反古・当世下手談義・風流志道軒伝・根南志具佐・根無草後編・当世穴さがし・遊婦多数寄・成仙玉一口玄談【近世雑Ⅱ期】交隣須知・四方のあか・癩癩談・玉勝間・道二翁道話・膽大小心録・形影夜話・山中人饒舌・松翁道話・蘭東事始・花月草紙・紹鷗茶湯百首・鳩翁道話・玲瓏隨筆【噺本Ⅱ期】軽口はなしとり・軽口機嫌囊・座狂はなし・軽口独機嫌・軽口蓬莱山・水打花・軽口耳過宝・軽口へそ順札・軽口腹太鼓・鹿の子餅・

楽牽頭・軽口大黒柱・聞上手・飛談語・坐笑産・口拍子・今年咄・聞上手二篇・近日貫・御伽噺・再成餅・都鄙談語三篇・仕形噺・絵本珍宝舛・新軽口初商ひ・軽口五色昏・茶のこもち・一のもり・和漢咄会・軽口駒佐羅衛・頓作万八噺・売言葉・鳥の町・一の富・立春噺大集・高笑ひ・夕涼新話集・書集津盛噺・年忘噺角力・春俗・管卷・時勢話大全・時勢話綱目・喜美賀楽寿・さとすめ・譚囊・今歳笑・福の神・青楼吉原咄・金財布・寿々葉羅井・気のくすり・万の宝・大御世話・明朝梅・鼠の笑・笑長者・豆談語・梅屋敷・嗚呼笑・話問訥・春帖咄・歳旦話・夜明鳥・落咄人來鳥・福喜多留・下司の智慧・百福物語・千年草・かたいはなし・うぐひす笛・福種笑門松・振鷲亭噺日記・富貴樽・拍子幕・落咄梅の笑・滑稽即興噺・わらひ鯉・軽口筆彦咄・鳩濯雜話・即当笑合・喜美談語・噺手本忠臣蔵・雅興春の行衛・臍が茶・庚申講・三歳智慧・無事志有意・新玉箒・塩梅余史・意戲常談・新製吹々雅話・臍煎茶吞噺・虎智のはたけ・曲雜話・馬鹿大林・太郎花・六冊懸徳用草紙・新撰勸進話・落咄臍くり金・珍学問・花の咲・麻疹噺・東都真衛・笑府商内上手・はなし亀・しみのすみか物語・蛭蝶児・落咄見世びらき・譚話江戸嬉笑・正月もの・瓢百集・笑顔始・玉尽一九噺・画ばなし当時梅・妙伍天連都・臍の宿かえ・会席噺袋・福三笑・身振噺寿賀多八景・〔芝居絵落噺貼込帳〕・おとぎばなし・春興噺万歳・はなしのいけす・小倉百首類題話・落咄屠蘇喜言・咄土産・白癡物語・落咄懸鎖・噺栗毛・かこひもの落し噺し・女郎買の落し噺し・十二支紫・延命養談數・落咄年中行事・笑語草かり籠・一口ばなし・百面相仕方ばなし・縁取ばなし・昔はなし・落しばなし・俳諧発句一題噺・万燈賑ばなし・春色三題噺初編【洒落本】史林残花・南花余芳・両都妓品（西都妓品・両巴厄言）・吉原源氏六十帖評判・傾城つれく草・疇陽英華・会海通窟・白増譜言経・百花評林・瓢金窟・華里通商考・華里通商考（異本）・阿房枕言葉・仙台治情・烟花漫筆・陌婦伝・猪の文章・当世花街談義・吉原出世鑑・交代盤栄記・談楽謀論談・魂胆総勘定・本草妓要・禁現大福帳・花菖蒲侍乳問答・穿当珍話・風俗七遊談・風俗八色談・西郭燈籠記・異素六帖・聖遊廓・花街浪華色八掛・秘事真告・遊子方言・辰巳之園・風流醉談議・甲駅新話・当世爰かしこ・郭中掃除雜編・傾城買指南所・富賀川拝見・蛇蛻青大通・卯地臭意・つれづれ醉か川・傾情知

接尾辞一クサシ再考（池上）

惠鑑・残座訓・通言総籙・青楼昼之世界錦之裏・傾城買二筋道・廓節要・老楼志【黄表紙】高漫齋行脚日記・莫切自根金生木・大悲千祿本・江戸生艶氣樺焼・心字早染艸・敵討義女英・賢愚湊錢湯新話・仙術独稽古【読本】雨月物語・椿説弓張月・春雨物語【滑稽本】風来六部集・戲男伊勢物語・東海道中膝栗毛・戲場粹言幕の外・浮世風呂・狂言田舎操・浮世床・大千世界楽屋探・七偏人【人情本】仮名文章娘節用・春色辰巳園・春色梅児誉美・貞操婦女八賢誌・春色恵の花・花の志満台・いろは文庫・閑情未摘花・清談若緑・春色恋廻染分解【俳諧二期（川柳含む）】与謝蕪村作品・小林一茶作品・鶉衣・誹風柳多留・伊勢冠付・神酒の口

近代（明治／大正・昭和（一九一九））【小説作品】既刊テキスト・「太陽コーパス」・「青空文庫」※以上から用例が得られたのは七七三作品（一九九作者）【落語速記】『口演速記明治大正落語集成一〜七』講談社（一九八〇・八二）、「昭和戦前傑作落語全集一〜六」講談社（一九八一・八二）※以上から用例が得られたのは一〇四話（三七噺家）

その他【辞書】新撰字鏡・和名類聚抄・色葉字類抄・類聚名義抄・下学集・和玉篇・文明本節用集・伊京集・明応五年本節用集・天正十八年本節用集・饅頭屋本節用集・黒本本節用集・易林本節用集・日葡辞書・書言字考節用集・日葡辞書・和英語林集成

別表 上接成分一覧

型		上接成分		
		（物質の変化を表す） 動詞の連用形		
Cクサシ		Aクサシ		
形容動詞語幹		名詞		
		抽象	具体	
		身分・立場・場所	物の名前	
<p>おかし、遅、とろ、のろ、古、まじろ「まじろい」語幹</p> <p>吝嗇、老実</p>		<p>阿呆、あんだら、威厳、いたずら、陰気、慇懃、因縁、胡亂、胡亂、演説、横柄、愚か、窮屈、形式、けち、源平時代、高慢、古文、思案、芝居、洪、自慢、邪魔、洒落、宗教、修身教科書、執念、殊勝、常識、辛気、神秘、粹、世間、説教、禪、総会、葬式、そそ「そそく」語幹、「そそつかしい」、大層、旅、だら、ちよぼ「ちよぼ」、哲学、道楽、鈍、生一牛半可、「にち」強請、「ねだり」強請、「ねち」強請、「馬鹿、半可、秘密、貧乏、風雅、文学、分別、文明、べらぼう、法、封建、真面目、間抜け、見一見た目、未練、名譽、面倒、勿体、野暮、幼稚、読本、理屈、吝、愷気、吝嗇、老実</p>	<p>アイメン「キリスト教徒」、空家、アメリカ、異国、異人、田舎、隠居、インテリ、インド、エッセイスト、奥州、落人、男、大人、親、親父、御僧、女、学者、神、唐、官僚、教員、教師、下々、賢人、孔子「孔子のよう」にできた人物、「子ども、子持ち、在郷、在所、侍、敷一鉢区」、爺々、支那、支那人、死人、十六一十六歳、「儒者、出家、女学生、植民地、所帯」所帯持ち、「素人、人物」二角の人物、「西洋、西洋人、世帯」世帯持ち、「仙人、内裏、高尾、他人、町人、寺、年寄、殿様、どぶ、泥溝、成金、日本人、女房、人間、盗人、野良、馬喰、化物、場末、畑、パテレン、万人、日陰者、人、人殺し、鄙、日向、病院、病人、武士、フランス、不良、文士、法師、坊主、仏、魔物、身一身分、「モラリスト、役所、役人、耶穌、耶穌坊主、野蠻人、妖怪、養子、ヨーロッパ人、留学生、老人</p>	<p>青「青もの」、垢、赤がね、芥、汗、油、油土、甘「甘い食べ物」、洗い粉、硫黄、息、磯「磯のもの」、イルカ、魚、鰻鮓粉、馬、膿、漆、煙硝、白粉、お前「特定的人物」、蚊、香、蚕、ガス、ガソリン、湯「湯のもの」、金、黴、紙、蚊帳、革、皮虫、紙子、缶詰、狐、衣、伽羅、黄燐、金箔、葉、糞、雲、クレゾール、毛、煙、煙獸、鉍気、麴、膏薬、ごみ、強飯、魚、酒、鮫、山水、塩、湿気、しわら「二鉢+情態言ラ」のもの、「しめ糟、麴香、シヤボン、熟柿、樹脂、小便、小用」行為ではあるが「小便」と同義で使用、「塵芥、酢、鮓、鮓桶、煤、石油、石鹼、セメント、線香、大根、煙草、ダリヤ、血、チーズ、乳、血生「血+生もの」、塵、津「津のもの」漬物、土、土気、銅、ドル、泥、ナフタリン、生一牛もの、「鉛、涙、鯨、尿、大蒜、糠味噌、葱、鼠、熱「熱気」、糊、舶来「舶来品」、バター「バター」、櫃、火繩、肥料、蒜、仏壇、古筆、紅、蛇、ペンキ、埃、抹香、松脂、魔羅、饅頭、水、水苔、味噌、虫、胸、メッキ、山羊、焼米、薬品、脂、湯の花、汚れ、燐、腋、腋臭、私「特定的人物」</p>
		<p>具体例</p> <p>熱れ、燻し「燻り」同一語扱い、「煎り、焦がれ、焦げ、湿り、饑え、寝「寝ること」による状態変化、「陳ね、ふすはり、蒸れ、焼け</p>		